
孤独を大声で叫んではならない

ツングー正法

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独を大声で叫んではならない

【Nコード】

N9510Y

【作者名】

ツングー正法

【あらすじ】

私は孤独だった。あまりに孤独だった。

もう、自ら命を絶つほか、この状況から逃げ出す手を知らなかった。しかし、そう決心した私の心の叫びは、様々なものを私の下へ呼び込み始める。

想像だにしていなかった状況下、私は孤独の再認識を開始した。

私は孤独だった

陽が沈んだ。

私の部屋が闇に包まれてからしばらく経つが、灯りをつける気にもならない。

ソファの上、窓の向こうを力なく眺める他、何ら生産的な活動をする気にはならなかった。

言葉に表すことが出来ないほど、巨大な孤独が私を押しつぶそうとしている。

あまりに孤独だった。

私の名前は、町^{マチ}小杖^{コツエ}。

この状況から逃れるには、死ぬしかないのではないのか。そう思い始めたところだ。

カーテンも閉めていない窓の向こうから、外の光が部屋へとさしこんでくる。人工の光だ。

この安アパートは道路一本挟んで繁華街に面しているため、環境は劣悪だった。行き交う車は途絶えず、流れるポップは騒がしいし、売り子が怒鳴る声が部屋にまで入ってくる。ネオンサインのけばけばしい光は、あまりに低俗で、満天の夜空を満たす星明かりと勘違いできるほどのものでもない。

そして、星は街の夜空から永遠に除かれて、戻ってくることはない。

大好きだったプラネタリウムも景気悪化に伴い、とうに閉鎖してしまった。数々の願い事を受け入れ、自分を抱擁してくれた星空は、もはやない。

同時にかっちゃんの手を取り、無邪気に実現不可能な願いを唱えていた初心な自分も死んだのだ。ここに残るのは滓であり、澱であり、抜け殻でしかない。

かつちゃん……客観的に言えば元カレだが、主観的に言わせてもらえば、大罪人に他ならない。

私の心を土足で踏みつけ、一方でこちらからどんなに語りかけても、それとわかる反応がなかった。彼の心の水面は、あまりにねっとりしていて波紋がたたない作りなのだ。まるで、洞穴に向かつて叫んでいるようなものだった。

付き合えど付き合えど、関係は進展せず、時間ばかり減って、歯痒さばかりが増えるばかりだった。

孤独感を紛らわせるためでなければ、どうしてあんな男が自分の精神の一部を占めるなんて事態を許しただろう。

そう、全ての元凶は孤独なのだ。

でも、もうプラネタリウムは潰れたことだし、プラネタリウムでかつちゃんと交えた囁きを思い出すのは苦痛でしかなかった。あんな男、膿にまみれて変死すればいい。

かくいう私も、これを機会に、死んでしまうべきだろう。

どんな方法が一便手っ取り早いのか。ネット上で、親切な人が説明をしてくれるかもしれない。ネット上にはありとあらゆる親切な人がいるのだ。

ぶーん、と音がして私の携帯『デカヅエ』が緑色に点滅した。

また屑メールが携帯の受信箱に積もっていく。親から、兄から、その脳なしの嫁から、バイト先から、大学から、そして顔を思い浮かべたくもないかつちゃんから。

あのくそ忌々しい男は、恥知らずにもメールなど送ってくるのだ。直接、私と対面するのが、それほど怖いのだろうか。

熱い怒りが私に力を与え、携帯へ手を伸ばすことが出来た。

「かつちゃんのバカ……人でなし……無神経……ハイパー無神経……」

私はぶつぶつ言いながら、携帯の中に積もったメールを一件一件、丁寧に消去していく。

大昔、携帯を買ってもらったばかりの頃は、スパムのメールを捨てるだけで身を切るような痛みを感じたものだ。だが、もう全てに慣れてしまった。精神は痛みになれ、摩耗され、そして原型を失っていく。

どのメールでも、誰も彼もが口先だけで綺麗なことを並べて、私の気を惹こうとしている。ときめいたり、わくわくするような種などなかった。それに気付くのになぜこんなにも時間がかかったのか、自分でも理解不能だ。

嘘に飾られた文書で目を汚すことなんてない。私はメールを残らず消去した。携帯をがらんつ、とテーブルに放る。

世の中、全てのものの表面が嘘で塗りたくられている。

うーん、とまたデカuzziがバイブする。

「……っさいわね」

ぶーん。

「もう我慢ならないわ」

私は低く唸ると、携帯をひつつかんだ。広くもない部屋を二歩で横切り、窓を全開にする。

腰をひねり、前腕と二の腕の角度を九十度に保ちつつ振りかぶる。左足をひねってトルクを与え、それからベランダの床を踏み抜くほどに叩きつけ、思い切り携帯を投擲した。

デカuzziは闇の中を一直線に飛んでいき、瞬時に見えなくなった。「さらばデカuzzi。よき星にて生まれ変わるのだ」

私は呟いて、携帯の消えた空をしばらく眺めていた。

地上がこれほど無駄に明るくなければ、おいぬ座シリウスの脇に、等級4ぐらいの新惑星デカuzziが見えたことだろう。

ストレス源の携帯が消えたことで、わずかながらすっきりした気分になり、踵を返した。

部屋に戻って、電気をつけなければならない。暗闇で生活していると、異常に化粧が濃くなってよろしくないのだ。

それなのに、足が進まない。私は訳もなく部屋に入れずにいた。

前面に暗黒の自室、背中に外の猥雑な空気を感じたまま動けなくなった。目の前の自室という暗い小空間に戻れない。戻って、胸を締め付けられる気持ちを感じたくない。不条理なことに、暗い部屋で、音を立てる携帯もなく、ますます味気がなくて、耐えがたく思えた。

ベランダの柵を背中に感じている。これを越えて、不愉快なもの全ての終止符を打つのがどうして難しいだろうか。

私の部屋は、このアパートの三階にある。飛び降りて死ぬのには十分な高さだろう。

私は夜風を受けながら、その行動力が自分の中で成熟するまで、じっとしていた。

やがて、機は熟したと思えてくる。

やるか。柵を乗り越え、わずかな自由落下でことは解決する。あまりに単純だった。

金の瞳

心を決めたその時、すぐ横で何かが動く気配を感じた。

暗がりの中で金色の瞳がきらりと光る。私はすんでの所で悲鳴を殺した。

「猫……ちゃん？」

エアコンの室外機の上、闇を切り取って、ふわふわの毛皮でくるんだような感じの生き物がいた。

真っ黒だった。完全に闇に溶け込んでいて、瞳は宙に浮いているようにしか見えない。私がおそろおそろ伸ばした手を、拒むでもなく撫でさせてくれた。

首輪をつけていないにもかかわらず、毛並みは綺麗だし、そしてその金色の瞳。驚くほど静かに、取り乱す私を映している。私は一発で魅了された。

両手を広げると、猫は自分から私の胸に飛び込んできた。私は夢中で猫ちゃんを撫でながら、部屋へと戻る。

「猫大好き……！」

頬が緩むのを抑えられない。

「猫もちろん、私のこと大好きよね」

猫を抱くのは生まれて初めてだが、予想していたよりも柔らかくて、温かかった。

なぜこの子達と、私はもっと早く出会わなかったのだろう。人間と違って、彼らにはうんざりする類いの裏表というものが存在しない。完全無欠の友となり得るとすれば、動物たちだろう。

もちろん、ペットショップを覗いてみたことがないわけではない。だが、契約で友を得ようという行為は浅ましく、一欠片の正当性もないように思った。国民の大半が銀行を教会と認識するほど、経済活動重視の病んだ世の中だ。金が全てだと思った瞬間、人間はおしまいだというのに。

そう、こういう巡り会いこそ、私が待っていたものだっただ。

出会ってほんの一分で、私は癒やされ、人間を相手にしたときでは、ついぞ感じたことがないほどリラックスしていた。

そんな状況で、私は気がついたらかっちゃんが悪口を猫にぶちまけている。

「あの男、無神経なのよ。とーにかく無神経なのよ。全体的に神経数が欠如してるんだわ。昔の私は青かったとはいえ、長々と付き合っ……信じられないわ。あんな奴、ただでさえ少ない神経が、びまん性に突発的な壊死をおこして死んでしまえばいいのよ」

得たばかりの友に、下衆の愚痴を流し込むなんて、なんとも罪深い。でも、私は自分の中に溜まった負の感情に窒息しかけている。

どうにかしてそれを解き放たなければ、私は朽ち果てる寸前だった。そして、猫ちゃんは全てを受け入れてくれた。

「かつちゃんなんて忘れようと、いろんな人に近づいてみたけど、やっぱりダメなの。どいつもこいつも、自分のことばかり。もう耐えきれないのよ」

ふと気になる。この猫……人語を理解したりするのだろうか。

ばかばかしい。私は頭を振った。

しかし、実際、猫ちゃんは私を見つめて微動だにしない。私の価値のない言葉を全て聴いてくれている。

猫が私の会った中で、最高の聞き上手だなんて、おかしいものだ。でも、不満なんてない。あるはずない。猫ちゃんのおかげで、乾ききって、ひび割れた私の心に、なにかが沁みてきて、本来あるべき形へ治してくれる気がする。

泣きそうになって、思わず、猫ちゃんをぎゅっと抱きしめた。

そうだ。

こういつときのために、ちゃんと贈り物はストックしてあることを思い出した。この素晴らしい友をもてなさなければならない。私は台所へ駆けていって、戸棚を開いた。

「猫ちゃん、こつちおいで〜いいものあげる」

かつおぶしの塊を揺らして、猫ちゃんを誘惑する。

猫ちゃんは飛びついてくるものと予想したが、首を傾げてソファの上から動かない。

「……かつおぶしは古典的過ぎた？」

とはいえ、私はポップ・カルチャーを全否定しているので、今日の猫が何を好むのか、全く知らないのだ。

猫は困ったように首をひねりながら、かつおぶしを受け取ると、舐めたり嗅いだりしていた。そして、おずおずと私の足下へ返却してきた。

「なによ！ 私の贈り物が受け取れないって言うの！？」

私は猫をにらみつけた。猫は肩でもすくめるように、ヒゲを揺らした。

贈り物を受け取ることを強要しようとしている時点で、すでに贈り物の精神から外れている気がしないでもないが、でもせっかく用意したのだ。無下にされたら悔しくないわけがない。

角を立てないためにも、妥協して受け取って笑顔を作るのが筋ではないか。猫といえども。

「はあ……」

溜息が出る。溜息をつくとき幸せが逃げると誰かが言っていた。でも、些細なことに幸せを見つけることが出来るほど私は子供じゃない。幸せの絶対量が初めからゼロに近いのだ。

怒りを持続する気にもならなかった。

「いいわよ……自分で食べるから」

かつおぶしをがりがり囓りながらも、猫ちゃんに見つめられるとまた愚にも付かない言葉が口を突いて出てくる。

「結局、私は世界の真の姿を突き止めてしまったのね。世界は嘘だらけ。将来死ぬ肉の塊に、せっせと嘘の情報を詰めて彷徨うもの、それが人間よ。こんな連中の群れに混じって、単色の人生をただすごすなんて耐えられる？ しかも、放つといっても、人間は百年生き

「ちやう時代よ」

メトロノームのように猫のしっぽがゆっくりと波打つを見ながら、私は言った。

「悪いものが入ってきて、墜ちて行く前に、自分で自分を始末しようと思うの。あなたに最後に話せて嬉しいわ。だから、お願い、全てを聞いて記憶してちょうだい」

猫は前触れもなく立ち上がると、とととと窓ガラスの隙間から抜け出ていった。

「猫ちゃん？ どこ行くのよ……」

私は狼狽して急いで追いかける。だが、すでにベランダに猫の影はなかった。

汚れた室外機や、雑多なゴミが散らばるだけだ。

「ちよつと……ここまで聴いておいて、私を見捨てる気！？」

口からかつおぶしが転げ落ちる。私はそれにも気づかず、呆然と虚空を見つめていた。

やがて部屋に戻ると、糸が切れたようにソファの上に崩れた。

耐えろ、コツエ。泣くほどのこともない。野良猫が部屋を横切っただけの話だ。こみ上げてくるものを抑えようと、手のひらをまぶたに押し当て、歯を食いしばった。

適当な動物に期待をして、心の一部を占めさせようとした報いだ。深く考えず、相手も選ばず、何をやっているのだから。

その時、ベランダでござござ音がした。見ると、黒い毛の塊が動いている。

「猫ちゃん！」

猫はベランダから、なにかを部屋に引っ張り上げようとしている。外で何を拾ってきたのだろうか。

そういえば、猫はどこかに新たな居を構える際に、その主に土産物を持って行く、と聞いたことがあった。世間の猫好きが流布した噂とばかり思っていたが、現実にここまで猫が律儀な動物だったとは、予想外だ。

獲りたてのネズミやゴキブリだったら堪らない。が、見たところ猫ちゃんはないか瓶のようなものを転がしてくる。

猫は床の上にしゃがんだ私の足下でそれを止めた。

「くれるの？ わあ……」

胸が一杯になる。

かつおぶしはお気に召してくれなかったようだが、お返しのためにも、私は猫を喜ばすためにあらゆる手をつくさないといけない。

私は瓶を拾って、記された表示に目をやった。

「なになに、『^{モノアミンオキシダーゼ}MAO阻害薬……処方せん医薬品……抗うつ薬……あなたの気分を明るくして、物事をポジティブに考えることが出来るようにするお薬です……他のお薬と併用することで予期せぬ副作用……ご不明な点は薬局まで……』 なによこれ」

私はじろりと目を動かして、猫を見下ろした。

「こんなものを一体どこから……いや、そんなことよりも！ 私の苦しみは薬なんかでごまかせるものだと言いたいの！？」

私の怒鳴り声に、猫は身をすくませる。

「若い人間の自殺が増えるのも知ってるけど、薬でどうにかしようという根性からして気に入くないわ！ 根本的に考えてみてよ。悪いものを一時的に抑えておこうという、その考え方からして問題よ。子供の夏休みの宿題じゃないあるまいし。お国の政治から個人の価値観まで、いろいろ狂ってる世の中をどうにかするのが先でしょ！ それを今の若者がだめだから自殺が多いとか、勝手すぎるのよ！」

私は一息にまくし立てて、大きく息を吸った。

「死のうとしているのは解決策であって、逃避ではないのよ！ 見くびらないで」

親しき間柄でも、礼儀は重要だと思っている。現代に生きる私たちは得てして忘れてしまいがちだが、他者への敬意は大切だ。

こんな侮辱は見過ごせない。

「なめた真似すると、肉を三味線、皮を鍋にするわよ」

私は猫に顔を近づけ、釘を刺す。

猫は目をまん丸にして、固まっていた。

「はあ……所詮は動物よ。大脳辺縁系使って、本能に従ってる奴らよ。畜生ごときに私の苦悩を理解してもらおうというのが無理なの……神経数が足りないんだわ」

私は呟く。これは事実であるはずなので、侮辱にはあたらないと私は判断した。

猫というのは、特に孤独っぽい生き物に感じる。孤独に苦しむなんてこともなさそうだ。

私は空しく笑った。私は一体、この子に何を期待しているんだか。自分の笑顔は泣き顔に近いんじゃないだろうか、なんて自分でも悲劇的な気分になってくる。

「分かてるわよ……私の苦悩を押しつけようとするのも勝手よね。癒やして欲しいのは私だもの。許してちょうだい」

そう言うってから、何もかもが嫌になった。

何が悲しくて、こんな世の中で這い回っていかないといけないのだ。どうして私が周りに合わないことを苦しむ必要があるのだろうか。

「あーあ、もう死んじゃおうかな……」

猫はぶんぶん首を振ると、薬の瓶に片脚を載せてみゃーみゃー鳴いてくる。

「黙らっしゃい！」

私は一喝して黙らせた。

「死よりマシな選択肢があれば、それを喜んで選んでるわよ。安易に死ぬことが、生命への冒瀆を表しかねないことも理解しているわ。でも、これは考え抜いた結果なのよ。止めようとするのなら、ちゃんと責任を負ってちょうだい」

私は猫に告げた。

だいたい、この現代社会であらゆるしがらみから逃れて心安らかなれる場所なんて、どこにあるというのだ。まず、文明世界の都心部は論外だ。

辺境の世界で心清らかな人々と、暖かみある交流をして過ごすというのは確かに魅力にあふれる。契約、義務、訴訟、債務、そういうものが追ってこないユートピア。

だが、現実には問題が山積みなのだ。

チベットのような場所へ移るにしても、出国や移住、あらゆるお役所手付きや障害が立ちふさがる。もっと近場の高野山なんて遙かに面倒そうだ。女人が入ることすらできないのではないか。

「人間を超越した存在にでもなることが出来ればいいのに。もうつまらないモラルとかコードなんてない、ものすごく自由な存在……。人の目も、法の目も気にしない、言うなれば絶対悪……」

私は遠い目をして呟く。

「……でも、そんなのないわよね」

猫がその言葉に機敏に反応して、ヒゲを立たせた。窓の外へ出て行く。

また去って行く気かと思ったら、猫はベランダに止まり、妙な動作を始めた。

「……何する気？」

トイレでも探しているのかと思ったけど、明らかに動作がおかしい。

前脚でベランダの床に何かを描いている。何か、パターンを持った模様だ。繰り返し繰り返し、一心不乱に描いているのだ。

古来、黒猫は不吉な運気をまとい、魔性の者に通じると言われてきた。

無知な昔の人間の迷信と断言するのはたやすい。だが、考えてみれば、火のないところに煙が立つはずがないのだ。

猫の前脚の軌跡が紅く光を放つ。不吉な印象を与える、紋章のようなものだった。

さらに猫がそれをなぞり続ける内に、紋章が脈打つように明滅した。鉄の匂いのする空気が渦を巻いている。

生まれて初めて見る超常現象に、私は息を呑んだ。猫は何かを召

喚しているのだ。

音もなく周囲の闇が凝縮を始める。

それが紋章の上で一点にまとまり、そして翼をもつ生き物に変化した。

カラス……？

いや、羽ばたくスピードが極端に速いし、翼の形も特徴的だ。コウモリに違いない。

それはむくむくと背を伸ばし、人の形をとった。

闇の王

漆黒の衣に包まれた、長身。長髪の下、白い顔が浮かび上がる。品が良さそうで、そしてまったく生命つ気を感じさせない男の顔。「くくく……闇を求める貴様の声に応じて、我輩はここに現れた」黒いマントをまとう男は、唇をつり上げて笑った。かすかに犬歯がきらめいた。それは牙のように長くて鋭く、そして血にまみれるのに慣れきった冷酷な色をしていた。

「我輩は吸血鬼だ」

「吸血……鬼」

闇の怪物。

人間の血を吸い、数々の闇の眷属を操る、恐ろしく強力な化け物。その人類の宿敵とでも言うべき、吸血鬼が私のベランダに立っている。実在したのだ。

まあ、これほど小説から映画、ありとあらゆるメディアに登場しているのだ。実在していない方がおかしい。私は痺れた頭で考えた。「招かれなければ、貴様が家に入ることが出来ぬ。さあ、我輩を招くがよい。狭すぎる人間の殻を捨て、闇を満喫する、誇り高き種へと昇華するのだ」

吸血鬼は、にたりと笑って言った。私は命じられるまでもなく窓を全開にする。

そして、次の瞬間には吸血鬼の腕の中にいた。吸血鬼の牙が、ぬつとその姿を露わにし、冷たい吐息が私の頸に掛かった。

私はうつとりと、その闇の気配を味わう。

「そんなに気軽に、私を同類にしてくれていいの？」

「我輩は貴様の強き孤独の念に惹かれるのだ。我々は闇の中に住まう。そこには、偽りの影を生む光など、初めからない。我々はあるがままに生き、望むがままを為すのだ」

「いいわね……最高よ、そういうの」

金色の瞳のみが見守る薄闇の中で、私は体温のない逞しい体に回した腕の力を強める。

「貴様には覚悟がある。よいドラキュリーナになるだろう」

「じゃ、私を吸血鬼にしてちょうだいな」

「くく……よからう」

冷たい牙が私の頸に触れた。さようなら、私の周りのつまらない日常。陶然とした意識の中、私は思った。

でも、どうも、こうやって話がとんとん拍子に進むと、私は逆に用心深くなってしまう性質なのだ。私は念のため、ちょっと相手を確かめてみることにする。

私は吸血鬼の耳に囁きかけた。

「ところで私、AIDSなのよ」

吸血鬼は身を離れた。

「我輩、突然急ぎの用事を思い出した。さらばである」

「ちよつと待った!」

歩み去ろうとする吸血鬼のマントを思いっきり引っ張った。マントに首を絞められた吸血鬼が、ぐへつとうめき声を上げる。

「嘘よ。……なにその変わり身の早さ」

「ええい、離さぬか! 貴様はAIDSで……あの忌むべき病で我が種族がどれほど死に絶えたのか知らぬのか!」

「知らないわよ! そんなのあんた達が、のべつ幕なく人の血を吸ったからでしょ!」

吸血鬼はマントを振りほどこうともがくが、私はがっちり握って離さない。

「で、なに? 病気が感染するのが怖いから、私を吸血鬼にするのはなし?」

私の問いに、吸血鬼は少し考え、
「同族にしてやることはかまわん。……が、その前にHIVと肝炎ウイルスの検査を受けてもらおう。いや、それでも心配だ。他の病も検査せよ。梅毒、結核、淋病、日本脳炎、塹壕熱——」

吸血鬼が既知の感染症、全てを列挙しようとするのを、私は不機嫌な呻きで遮った。

「さあ、我輩とともに夜間病院へ行こうぞ」

「もういいわよ！」

私は叫んだ。

「幻滅だわ。吸血鬼ってすごいモンスターだと思ってたのに。病気に怯えてなにが不死人よ、闇の怪物よ、夜の王よ」

「我々はすごいモンスターである！ 我らは犬に、コウモリに、霧に、自在に姿を変え、夜の世界を支配——」

「変身が何よ。人間だって、酔えばトラになるし、他にも負け犬になり、鳥目になり、兎唇になるわ」

「吸血鬼は人間をばる雑巾のように引き裂く怪力を持っておるのだ！」

「私だってばる雑巾ぐらい裂けるわよ。全然たいしたことないじゃない」

「ぬうつ、素直に感心して、畏怖する場面だというのに、この小娘は——！」

吸血鬼がわめく。彼の爪がにゅつと伸びて、髪が逆立つ。そして体毛が濃くなり、目が真っ赤に染まった。

闇の怪物がいきり立っているのだ。身長すら伸びて、その頭は天井をこすらんばかりだ。邪悪な気迫が脈打ち、私を打ち据えた。

あいにく、ちつとも怖くない。ちつこい犬が、強がって吠えているようなものだ。もうこいつの底にある弱々しい部分を垣間見てしまった以上、恐怖の感じようがなかった。

「あら、どうするの？ 私の血を吸う度胸もないんでしょ？ 暴力でもふるう？」

私は挑発的に言ってみた。

吸血鬼は口をかつと開き、目から炎を吹いていたが、やがて、私の見ている前でしおしおと小さくなっていく。元の大きさに戻って、しわがれた声を発した。

「いや、それは出来ぬ。人間相手に問題を起こすと、聖別された刃物を持って、ラテン語を口ずさむ陰気なお兄さん方に我輩は追いかけ回されるのだ。我輩、戦いは苦手だな」

「はあ……」

溜息がでた。

「見下げ果てるわ。ブルム・ストーカーが嘆くわよ」

「誰なのだ、それは？」

「出て行って！」

私は全開になっている窓を指して、吸血鬼を睨み付ける。彼はあたふたし始めた。

「いや、そんな殺生な。貴様の望みに応じてはるばる来てやったのに、帰れなどとは……！　せめてトマトジュースの一杯ぐらいは出てもおかしくあるまいか？」

「うちにはかつおぶししか常備してないのよ」

私は猫を抱き上げて撫でながら言い放った。

「その猫だって、我輩の眷属なのだ！　だから我輩にももっと敬意と畏怖を——」

「あら、上の無能を下が補うスタイルね。猫ちゃんの方が百倍、好感持てるわ」

「そんな……」

闇の怪物はがっくりとうなだれ、力なくベランダへ出て行った。その姿は日光に曝された後のように弱々しかった。

誰にも注目されず

猫をテーブルの上に下ろし、私は力なくソファに崩れ落ちた。

とんだ見かけ倒しもあったものだ。

結局、嘘のかたまり。かの吸血鬼の伝説だって他のみんなと同じ。偽りの言葉ばかり集めて、それを信じるバカをバカにするだけ。

血を求めて甘い声をかけてくるなんて、低脳のポン引きと同じレベルじゃないか。

本当に私のことを考えているはずもなかった。そんな高尚な精神の下地はないだろう。暗くしてしめった培地には、ひねくれたものしか生えないのだ。

まったく、嫌になる。

「私はそろそろ死ぬべきね」

私は言った。

「早まってはならぬ！ 貴様はよい吸血鬼になれる。だから、我輩と病院で血液検査——」

「シャラップ！」

私は一喝して黙らせた。

まだいやがる。しつこいようなら、バチカンやヴァンパイア・ハントーを呼んで、駆除してもらわないといけないのかもしれない。

だが、今はそんな気力もなかった。

私は理解した。吸血鬼になったところで、何の解決にもならないのだ。

死ぬ運命だろうと、不死だろうと、なにも変わらない。私が逃れたがっているものから逃れることも出来ず、得るものはあまりに少ない。惨めなだけの不死人になるなんて問題外だ。

ポイントは、私が何か、ではなく他者との接点の不完全さなのだ。「七十億も人間がいる中で、何で誰とも本当の意味で理解し合えないものかしら。誰も、他人の感情を理解できないのよ。理解してい

るように振る舞うことしか出来ないの」

猫相手に、私は言った。

あまりに人間は不完全な生物だと言うしかない。さして役にも立たない知性ばかりが膨らんで、アンバランスなのだ。

誰もが自分を中心に考え、他者のことを考慮することもない。他者を注目することすらない。

「分かる？　だあれも、私を注目なんかしてくれないのよ」

私は嘆いた。

猫のヒゲがぴくつと震えた。立ち上がると、部屋の隅へと走っていく。

「どこ行くの？」

猫は壁の一点を見つめて、微動だにしない。

安アパートの壁は汚い。長年にわたる雨漏りや、タバコの煙の結果、シミだらけだ。でも、なにか猫の気を引くような、面白いものが貼ってあるわけでもなかった。

もしかして、あれだろうか……。猫は、霊とか見えないものを見ることが出来るという噂。私の部屋には何か地縛霊とか憑いているのだろうか。

次の瞬間、猫は後脚立ちになると、勢いよく部屋の壁で爪を研ぎ始めた。壁紙が千切りになり、木くずが飛び散る。

おとなしい猫ちゃんが、このような暴挙に出ることを予想していなかった私は、一瞬対応が遅れた。

「ああもう……壁で爪研ぎとか、ねえし！」

私は猫のしつぽを握ると、頭上でぶんぶん猫を振り回した。悲鳴が上がるが、構わず百回振り回した。

しつぽは大切だ。ゆとりが大切なって言う人間がいるため社会がおかしくなっている。やっぱり、鉄の規律に鍛えられてこそ、人間も動物もしゃきつとする。私はそう考えていた。

よれよれになった猫の顔をのぞき込み、

「今度やったら、あんたの頭をジャック・ハンマー代わりに使って、

リフォームするからね。分かった？」

猫を床に放り捨てた。

壁の被害を確かめた。薄い壁はすたぼろで、部屋の貧相さをさらに強調している。無視できるダメージではなかった。

薄い壁は、猫が三秒爪を研いだら壊滅したのだ。いくら安アパートとはいえ、脆すぎる。信じられない。もはや建築詐欺のレベルだ。果たして、ホームセンターへ行つて、自力で直せるレベルなのだろうか。

ふと、違和感を感じた。だまし絵を見ている気分になった。なんだろう、二次元が三次元へと化けていくような感覚だ。

私は目をしばたき、壁を注視した。猫が破いた壁紙の向こうに、何かがあった。

長年、壁のシミだと思っていた黒い点が、壁の向こうで正体を表している。

ぞっとした。

カメラだった。

私はどうにか驚きを飲み込んで、目をそらした。

監視されている！？ 私は極めて注目されていた。

一体、誰によつて？ 親だろうか？ 娘が問題なく一人暮らしをやっているか見るために？ いや、私の親だ。それはない。

すると、他人なのだ。誰か知らない人間が、この部屋にカメラを仕掛けたのだ。

一体何のためだろう。想像もつかない。

足下がぐるぐる回る中、どうにかソファへと戻つて座る。

ソファに座っていれば、カメラのある壁に背を向ける格好になるとはいえ、今現在も一挙一頭足が見られていると考えて間違いないだろう。

それとも、カメラは複数仕掛けられているのだろうか？ 部屋は暗いが、赤外線カメラかもしれない。あるいは、盗聴器まで？

猛烈な吐き気を感じた。肌を虫が這っているような感触が消えない。

「……胸が悪いわ」

耐えきれずに、呟いた。

「大丈夫か？ 吐くか？」

ベランダの暗がりから、吸血鬼が心配の声をかけてくる。

まだいやがるのか、と私は彼を睨み付けた。あんなの相手にしている場合じゃない。カメラの方が遙かに深刻な問題だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9510y/>

孤独を大声で叫んではならない

2011年12月3日18時51分発行